

彼女は不思議な人だつた。

桜ではなく、梅が似合うそんな少女だつた。

「クラスメイトくん、大好きだよ」

子犬のような笑顔で俺に微笑み、愛を囁く。

「きみが好きだよ、クラスメイトくんが好きだよ、だからずっと一緒にいてね、私はクラスメイトくんしか見てないし見る気がないから、大好きだよ」
自分を低く見積もる癖がある、誰よりも天才で欠陥を持つて生まれた少女。人の名前を覚えられない、そんな少女。

「暖かい家庭で育つた君にこんな醜いあたしはふさわしくない。だから好きって言っちゃダメだよ……」

そういうわれた時、俺は自分が彼女の事情を甘く考えていた事実に直面し

た。それでも、それでも彼女が好きだった。

彼女がそう思っていても、そういう考え方を持つてはいるところ含めて愛しているから好意を伝えた。

いつか、全員に与えられるべき彼女が弱みに付け込んだだけだと俺を憎んでもいい、俺以外の人間を好きになつてもいい、でも今の彼女を救えるのは俺だけだから、だから救いの手を伸ばした。

今の俺を信じてほしいから、裏切つたら刺してもいい、そんな約束をして。

幸い、彼女は何年たつても俺のそばを離れることはなかつた。

オレも彼女をずっと愛し続けたし、彼女も俺をずっと好きでいてくれた。

学部は違うが同じ大学に進学し、就職した後結婚し、俺達の間に子供が生まれた。

「ねえ、あたしね、貴方に出会えて本当に良かつたって思つてるよ、だから
ありがとう、私に幸せをくれて、家族になつてくれて、大好きだよ」

ずっと心残りだつた、彼女を救えたのかどうか。

ずっとこの関係が共依存ではないのかと思つていた。

俺は彼女を救えたのだ、あの時の俺の選択は間違いではなかつた。

誰にでも享受されるべき幸せを与えることができた、そして彼女からあ
りがとうという言葉をもらえた。生きていてよかつた、彼女と仲良くなるき
つかけがあつてよかつた。

——俺は運命に感謝した。

